

「未来構想」テーマに松江でシンポ 工区は干陸せず 漁業振興に

小松HNS研究所代表が私案

中海・本庄工区の将来的な利用構想について、小松電機社長の小松昭夫HNS（人間・自然・科学）研究所代表は二十三日、「工区は干陸しないで栽培漁業に利用し、貯木場周辺と西部承水路を、周辺の山を切り崩して干拓・造成」する案を発表。続いて開かれたシ

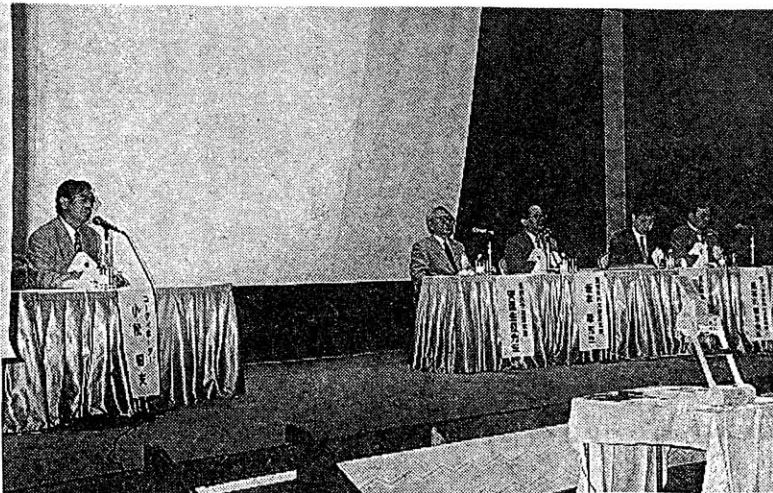
ンポジウムで岸博・農村環境研究会代表は、湖床のヘドロ除去に循環処理システムを導入することを提言した。シンポジウムは、「本庄工区の未来構想」をテーマにHNS研究所が松江市内のホテルで開き、約五百人が参加した。この席で小松

代表は、本庄工区を中心として①総合企画研究事業②栽培漁業関連事業③有機農業関連事業④水処理関連事業⑤知的観光観光事業——を創出するべき、とし、農業と漁業を中心とした国家的なプロジェクトとして先端産業の創出を図るべきだ、と提言した。

続いて開かれたパネルディスカッションでは、岸農村環境研究会代表が「ヘドロのしゅんせつには問題がある」として、その理由に▽流動性の高いヘドロはしゅんせつ出来ない▽大量の薬品を使う▽最終処分場が困難▽事業効果が見られない——ことを挙げた。その上

で同代表は循環処理システムを導入した水処理をあげ、酸素を吹き込んで土質を改善したヘドロの農業利用を提案した。

このほか、坂本巖島根医科大教授は、汽水域の生態系を活かすことの重要性を、長谷川泰治株式会社テクネ研究所代表取締役は「日本海文明の時代が到来する時、本庄工区は普遍的テーマを出せる」とそれぞれ訴えた。



二十三日にあったシンポジウム。話はヘドロの除去方法 農業振興にもおよんだ。